
彼女と別れる上手な方法。

あーみん@マツサ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼女と別れる上手な方法。

【Nコード】

N7998K

【作者名】

あーみん@マツサ

【あらすじ】

「三好京平、でてください。あんたがあたしの夫に相応しいか…見定めてあげる。」

突然目の前に現れた生徒会長

「結婚しようって言ったのは京ちゃんじゃない！この浮気者！スケベ！人間のくず！」

初対面？の天然系毒舌転校生

「おにいと結婚するのはあたしだよ。
ほかの女の人なんてみないでよねッ」

二人に対抗心を燃やすヤンデレな実の妹 実の妹……！！？

2（理論）×感情論×思想派の思考がぶつかる！

現実と理想が交差する時、物語が始まる。

（この作品は男性向け玄人向けアニメ好き向け心の広い方向け）

きゃらしょうかいのじかん。

キャラクターの詳細は少しずつ更新していきます！

見方が最初はわかりないと思いますが、訳わからなくなったりしたら、見ることに推奨ページ。

基本的には読まなくていいです。

一炉木 いちろぎ 夏姫 なつき

A型。理論派（+）
生徒会長。
身長高須。巨乳。裸眼。

二ノ瀬 にのせ 綾芽 あやめ

O型。感情論派。
転校生。貧乳。眼鏡。

三好 みよし 乃愛 のあ

AB型。理想派。
妹。貧乳。裸眼。

三好 京平
みよし きょうへい

A型。理論派（-）
主人公。男。眼鏡。

三好京平の憂鬱。

自分は何の為に生まれてきたのか、などと真剣に考える事のできる暇人は、

卵が先か鶏が先かを無限ループで考える能力を持つ最近では希少価値の低い、中二病患者であろう。

…それも末期である可能性が高い。

そもそも答えのないものを探す、考える事が無意味だ。

例えば、難しい数学の問題を解いていたとして。

解き終えた後に回答をなくしてしまったとする。

その瞬間、問題を解いた事実は無意味なものとなるのだ。

努力が水の泡とはよく言ったもので、問題を解く事自体にさほど意味はないのだ。

本来問題を解く事の目的は、どこを間違えてしまったのか知る事にある。

つまり何の為に生まれてきたのか、という問いの答えをどれだけ考えた所で時間ばかりとる上、
誰もが納得できるような答えはでてこない。

そしてある時気づくのだ。

明確な答えなど一生わかる事はありません、と。

自分はそういう考え方の持ち主なのだ。何に対しても。

理屈っぽくて他者から見ればつまらない男。

良くいっても現実主義者。リアリスト程度のもの。

もちろん幽霊も宇宙人も未来人も超能力者の存在も信じていない。

世間話のついでで言えば、自分もサンタクロースなど昔から信じていなかった。

どちらかと言えば着ぐるみを被った人間を下からのぞきこんで、
被り物と被り物の間から僅か^{わず}に見える人間味溢れるそれを見て、
きゃっきゃ言って喜んでいるような

…なんとも可愛げのない子供だったと思う。

自分の性格はあの時から根本的なものはなに一つ変わっていない。
背や体重が成長しようとも、それは本当に些細な事で。

結局自分が直接見ることでできない外見部分の容姿が変わったところで、自分しか知る事のできない内面部分は何も変わっちゃいなかった。

こんな自分は……

「三好京平！」

チャイムが鳴るのとほぼ同時に突然自分の名前が呼ばれ、
京平は否応なしに現実へと引き戻された。

右手にはゆるくシャーペンが握られていて、気づけば授業は終わっている。

ぼんやりと俯くような体制のせいで教科書が視界一杯にあった。

どうやら授業中に目を瞑った状態で気を失いながら考え事……平たく言うと居眠りをしてしまったようだ。

先程京平を呼んだ女？は、今の今まで授業を担当していた教諭を押し退け、教壇へと上がった。

もちろんその際先生側に拒否権などなく、

無理やりといった感じは見てすぐにわかる。

「三好京平、できなさい。」

「…なっ」

…これは聞き間違えか？まだ夢の中なのだろうか？

と自分に優しい思考を巡らせるも即玉砕。

もう一度自分の名前を口にされ、
更に見たことのない女の顔と声に動揺する。

寝ぼけ眼を擦りながら鼻の先までずり落ちた眼鏡をかけ直し、
一生懸命頭を働かせる。

が、いまいち京平は自分の状況を把握できていないでいた。

読者もポカーンとしている事間違いない。

… 出てこいっていう口調からすると、確実に怒っているのだろう。
う。

そうじゃなければあんな威張った言い方、普通しないだろうし。

名乗り出ようか、

名乗り出まいか…

これは一旦様子を見た方がいいかもしれない。

返事をしないのは失礼かもしれないが、
知らない女に訳もわからず怒られるのも納得いかない。

それに自分の男のカンがやつは危険だと告げている……ような気
もする。

クラスメートのお前名前呼ばれてるよ的な視線はとりあえず無視
の方向でいこうと思「おい、きょーへえ。夏姫に呼ばれてんぞー」。

「

「どうあつ……」

級友の声に訳もない不満をどこかに感じた。

本人に責任はないが、ありがた迷惑に違いない。

当然その声に反応した教卓前の女は、京平の方へ視線を向けると、
口を結んだままじくじくと机の合間を縫うようにして近づいてきた。

何を言われるのだろう、京平は息をのむ。

クラスメートの視線を浴び覚悟を決めて身構えた。

名前を呼ばれた手前後にひけないのはわかっている。

教卓前からこちらへ向かってくる女

…彼女は長くきれいな髪をサラサラとなびかせながら、また茶色い瞳で真っ直ぐに京平の方を見た。

顔は無表情のように見えるが、

怒ってると言われればそんな気もするような…少し冷めた表情。

「あんたが三好京平？」

「……っ！」

「なんとか言いなさい。」

なんかすんごい威圧感だ。

思わず『す』と『ご』の間に『ん』が入ってしまう程に。

わかりやすく威圧感を数値に直せるとするならば、

常人<波平<ジャイアン<<<<< 越えられない壁 <<<目の
前の女<小沢さん

って程に。

さすがに小沢さんには負けるが、
石原都知事相手なら勝るとも劣らない、といった所だろうか。

……ってこの説明はいらぬか。

しかし女ごときに怯^{ひる}むなど格好悪い、という自尊心から動揺を悟られないよう目は決して逸^そらさない。

京平は座っている為、どうしても見下されてる感があって非常に不愉快だった。

できる限り関心のないように振る舞おうと、思い付く限り短い言葉を使う。

「…ああ。」

「ちゃんと言って。あんたは三好京平？」

「三好京平。」

「この学校にあんたと同姓同名の人間は？」

「自分の知る限りいない。」

「私の知る限りもないわ。」

「へえ……。」

え これで会話終了なのだろうか？

質問の意図はおろか、彼女の名前すら知らない。

困ったよ。こまったさんのホットケーキだよ。まったく。

もう自分が何考えてるのかすらわからない。意味がわからない。

「じゃあ、今日からよろしく。三好京平。」

何秒間かの沈黙の後、スッと左手を差し出して握手を求められる。

席を立つて制服のズボンで軽く手を拭くと、つい営業スマイルで
ああ、どうもどうも。

なんて言いながらペコペコ頭を下げようとしてハツとする。

「な…なにがよろしくだつ。馴れ馴れしい。
自分に何の用か言え。話はそれからだ。」

行き場を失った左手をふらふらとさ迷わせた後、腕組みをした。

「ふん、優しくないわね。好感度DOWN。」

「は、はあ!？」

「好感度よ好感度。あんたぎやるげいむってやったことある？」

「ぬぁ…っ！」

「ぬぁって何よ。ぬぁって。」

あまりにも彼女と彼女の言葉にギャップがありすぎて京平はもう動揺しまくりだ。

ぎこちない発音で口にされた『ギャルゲー』には、芸人ならば雑壇から転げ落ちる程にツツコミどころ満載。

「自分はギャルゲーは…たしなむていどにしかやらないが…。」

「やるんだ。あんたそんなげえむやるんだ。ときめきメモリアルやるんだ。好感度DOWN。」

「何ゆえときメモ!？」

つか、何の好感度だ。何で自分の好感度言っちゃってんだ。

つか、その好感度って貯めると何が起るんだ。お前ルートか。お前ルートという恐ろしいBAD ENDか。」

少し前に決めた、なるべく短い返事でクールぶるという作戦はいつのまにかなくなっている。

京平はうつうつしいくらいの勢いで、くどくもツツコミ一覧表状態。

全て疑問を言わなくては気がすまないところは、
オーマイキーならナンデくんポジション。

「まあ、そーゆー訳だから。」

「いや、どーゆー訳かさっぱりわからないんだが。」

少し強い口調で追い込む京平は、だいぶ気持ちに余裕がでてきた
のであろう。

何でもないような表情に、眼鏡の奥では少し目を細め、
いつもより鋭い目つきで彼女の方を見た。

もちろん高須竜児のような、ヤンキーを思わせる程の迫力も、
逢坂大河のような虎を思わせるオーラもない。

有吉があだ名をつけるとしても『THE 神経質。』といったあ
りきたりなものがでてきそうだ。

まさにインドア派の典型で恐いといった印象は全く無い。

四文字熟語で表すとしたら？と尋ねられれば、

『亭主関白！……』ってあれ、これ四文字熟語だったわけ？

みたいな事になるんじゃないかなあ・・・なんて考えたりもしまし
て。

瞬間、彼女の肩が揺れた。大きく深い息を吸ったのだ。

両目は京平を確実に捉えている。とら

小さな口が大きく開かれ

「あんたがあたしの夫に相應しいかどうか……見定めてあげる。」

え？

さて、ここもつつこんだ方がいいのだろうか。

「ええええええええええええええええええ！？」

京平が言葉にするよりも早く、クラス全員が驚きの声をあげた。

それも当然。さっきまでクラス中の視線が二人に集まっていたのだ。

一応ちら見程度で様子を窺うかがっていた外野は、途端とたんに大盛り上がり。
どれくらいって…そりやあもう、ワンピースに出てきそうなくらいのハイテンションさで目なんか見開いちゃって。

なんだかとてもジャンプノリ。

「夫だつて…。」

「結婚か！？結婚なのか！？」

「最初っからクライマックス！？」

「むしろ出オチじゃねーの？」

火をつけたように話はどんどん大きくなり、話の発端である京平と彼女はいつの間にか置き去りにされていた。

ノリのいい連中はヒューヒューなんて昭和の匂いを漂わせつつ、
分かりやすく煽^{あお}ってくる。

「まあ、そーゆー訳だから。」

「どーゆー訳かさっぱりわからんのだが。……ってあれ、デジャウ
ゝ？」

これだけ周りが騒いでいても気にならないのか、彼女は平然としていた。

むしろ

『返事は？』

と催促しているようにすら見える。

もちろん YES OR YES といった、悩む時間を与えない
とーっても親切な選択肢のみが与えられている訳だが。

そして肝心な事を忘れていると気付く。

その忘れた事さえ忘れそうな程に強いインパクトから、
彼女が馬になったとするならディープリンパクトだな。ははは
なんて京平は考える。

つまらない。そうか、つまらないか。よし、じゃあこんな小説読む
のやめちまおーぜ。はは
なんて作者は考える。

京平が思い出した、というのは彼女の事だった。

もつと言つなら、彼女とは何なのか、という事。沢山の方向からみ
た彼女が知りたいのだ。

もちろんそれは哲学的にアイデンティティー（自己同一性）とは
何かを考えるような事ではない。

もつと単純で簡単で明快で純一で。

彼女彼女と先程から三人称女性代名詞でしか表現できないのは結
局、彼女が誰なのか限定できないからだった。

深い深い詩的表現の人間とは何なのかなんて重たい質問ではなく、へい彼女、お名前は？

と、軽くナンパを試みる第一歩のような質問。

あまりにも初歩的すぎて今更？って感じもするが聞こう。聞くのだ。

京平は小さく息を吐いた。

「お前……名前は？」

「今更？」

わお、予想通り！
なんて驚いてる場合ではない。

マヌケな質問をした事は百も二百も承知の上だ。

「あたしは一炉木夏姫。^{いちろぎなつき} 気軽に夏姫様って呼んでくれていいわよ。
三好京平。」

「はは。面白いな一炉木は。」

「……？」

乾いた笑みを浮かべながら^{まぶた}瞼が^{けいれん}痙攣するのが京平自身もわかった。

さて、気軽に様付けとはどのような状況で使えばいいのだろうか。

このふざけた女をテーブルの上の透明の灰皿でもってガツンと…机の上の教科書でもってポカンと叩いてやろうかと考えている。

そんな京平を他所^{よそ}に夏姫の顔は真剣そのもの。

冗談は笑って言うものだと言わねえと誰か教えてやってほしいものだ。

精巧に出来たお面か、はたまたルパンの変装か、そうでなければ納得できないくらいに夏姫の瞳は瞬き一つしない。

きれいな顔してるだろ……生きてるんだぜ。

なんておっさんホイホイな冗談が通じる事もないだろう。ここは真面目に。

「何でここに来た？」

「徒歩できたわよ？」

「ああ、いや、そうじゃない……」

挫折した。即挫折してしまった。

まずは簡単な質問からしたつもりだったのに一言目でもう話が噛み合わない。

京平は気まずそうにハニカミながらぼりぼりと口の端^{はし}をかいた。

「え、ええと…」

早くも次の言葉がみつからない。聞かなくてはいけない事は沢山ある筈なのに適切な言葉は大事な時に限って出てこないものだ。語意の問題ではない。もっと根本的な所から間違っているのだ。

「えっと…あの……」

気まずい。妙に空気が重い。

空白の時間を埋めるように、京平は意味のない言葉をただ口から漏らすだけで、前には進めない。

今まで異様なまでに盛り上がっていたクラスメートは、変に気をつかい、再び静かにこちらを見守っていた。

各々自分の帰り支度はきちんとしながら、顔だけは京平と夏姫に向ける野次馬ばかり。

白けた空気と周りの好奇心を孕んだ視線はプレッシャーにしかならず、京平の口元をかいていた手にも思わず力が入る。

さて、この状況を打開する策があるなら、誰かこっそり自分に教えてはくれないだろうか。

などと自分で考える事を放棄した人任せな京平に、誰かが手を差し伸べてくれる訳もない。

しかし、そんな状況下で藁^{わら}を放り投げた人物は意外にも意外。

京平を溺れさせた張本人である。

「今日のイベントはここまでよ。」

夏姫ははっきりとした口調で言った。……また、意味のわからない事を。

ボリウムとしては小さいが少しだけ高くてよく通る綺麗な声が京平の鼓膜を震わせる。

顔は精巧に作られたお面……以下同文。

「え………？」

意味不明な言動にマヌケな声を上げて固まる京平の前から、夏姫はくるりと体を半回転させて、そのまま一直線に教室の前の扉へ。

「ちょ、ちよつと」

スタスタと、入って来た時同様に何の躊躇ためらいもなく歩いて出ていくとする。

京平は思わず手を伸ばしかけるが、今は何とっていいのかもわからない。

「また明日ね。三好京平。」

ガラガラと大きな音をたてて、教室のドアは勢い良く閉まった。

意味がわからない。

全く意味がわからないのだ。

嵐のように去っていった彼女を思い浮かべながら、京平はじっと立ったままで動く事もできないでいる。

再び扉が開く時は、全員一斉に目をそそいでしまったが、そこから出てきたのは見馴れた中年のおっさんの顔。担任のなんとか先生である。

皆期待したのか、それとも安心したのかは解らないが、長く息をついた。

その時、京平の良く知らないクラスメートが『会長』という単語を口にしたが、京平の耳にまでは届かない。

しかし、確かに聞こえたのだ。

日常が崩れてゆく音が。

何かが変わる予感が。

直ぐそこまで迫っている。

積み木崩しなんて可愛らしい音じゃない。東京タワーを爆破させ

るくらいのでっかい爆音。

きつと退屈などする事はない。

MIYOSHI!

日本人の男が、どれだけ『妹』と言う言葉に甘く、優しい響きを感じているかはインターネットで妹と検索してみれば一目瞭然である。

2030000件という是非とも自分の貯金の数にしたくなるような、0いっぱい夢いっぱいな数字にここは一つ、三好京平が物申す。

妹なんて生き物が穏やかで素直なのは想像と2のつく次元でだけ。

裸ワイシャツなんて死んでもしないだろうし、したとしてもリアル妹など可愛くない。可愛いわけがない。

人畜有害。生ける有害図書。

Z指定してやりたくなる程暴力的なシーン有り。なのだ。

それから、99%わがまま。

そして99.9%の確率で五月蠅い^{うるさい}。若しくは面倒くさい。

一人っ子や、男兄弟で育った人間にこの苦しみはわかるまい。ええい、わかるまいとも。

きつと犬の方がよっぽど従順で、まごころを尽くしてつとめてくれるだろうし、

インコの方が馴れてつき従うだろう。

手のかからなさで勝負するなら亀が優勝候補。シード権獲得。

そんな風に妹に対して否定的に考える三好京平の家族構成といえ
ば父、母、自分、妹というごくありきたりなもので、ペットは何も
飼っていない。

しかし、聞いてくれ。若しくは聞いて下さい。

非常に矛盾してる話のようにも聞こえるが、ここは言い訳させて
ほしい。……させて下さい。

この境遇には二つ程ワケがある。

まず一つ目は、気付けば妹は存在した事。

四歳差というちょっとだけ近い年齢差の為に、物心ついた頃には
家族の中にいたのだ。

妹を産むかどうかの選択権など当然自分にはなかった。設定であり、

オプションであり、自らの意思で手に入れたものではない。

そして二つ目、その自分の妹と言うのが 「おつかえりいゝ！
おにいー」

「ただい……ぐはっ」

残りの1%だった。彼女は少数派に属する0・1%側の妹なのだ。

彼女は京平が帰ってくるのを玄関で待っていたのか、扉を開けた瞬間薄っぺらい胸板へ大きくダイブしてきた。

飛び込んだ拍子に彼女の頭が京平の肺の空気を無理矢理抜き、勢いのまま押され背中を強打し咳き込む。

京平の迷惑も御構い無しに彼女は小さな手を京平のお腹のあたりにまわしてぴつとりとくつついてきた。

「お帰りなさいおにい。さっそくのあと遊ばー！」

「げほっ……わかったからどけて。ほら。」

京平は後ろ手に鍵をかと革靴を脱ぎ、少し前に帰ってきた筈の妹の靴と一緒に玄関の端に並べた。

くつついて歩く妹に、二人三脚でもしてるような歩きにくさを感じて、二人三脚がこれだけ大変ならば、20人21脚はもうありえな

いくらい大変なんじゃないか……

と下らない事を考えながら妹を引きずりリビングへ向かう。

「おにいつてばあ〜！遊ば遊ば！何して遊びたい？」

「だあーっ！何なんだよ。今帰ったばかりだから後で。」

「いつならいーの？後でってあとどれくらい？何時何分地球が何回まわったころ？」

天井も高く、広々とした部屋の造りになっているからか、彼女の高い声は一階中に響いた。

小柄な彼女には釣り合わない程の元気いっぱいさ、今まで学校に行っていたのは同じの筈なのに、京平とテンションに差がありすぎる。

「……地球が何回まわったかなんてわかる訳ないだろ。ちょっと静かにしとけ。」

「わかるもーん！地球は1日に1回しかまわらないんだから、それと地球が誕生してからの日にちをかければだいたい……」

「なんだ、そんな地球規模の曖昧さでいーのか？じゃあ今月中には乃愛と遊ぶ。」

「やだあー！今日中がいい！今日遊ぶ！おにいはだまっつてのあと遊べばいーのッ」

彼女 妹の名前は三好^{みよし}乃愛。

外見は京平と全く似ておらず、小顔の為ショートカットがよく似合っている。小さいのは顔だけでなく、顔や胸も……げふんげふん。一見甘えん坊で無邪気な印象も受けるが。

「乃愛も自分勝手だな。女は結構そうゆう人多いのかな？」

「そんなことないよー……って。も？もって何？」

いきなりずん、と声が低くなった。

今さっきまでにこ にこって感じで長い襟足えりあしをふわふわと揺れさせ、元気にはしゃいでいたのがイキナリ動きを止める。

「え？何、も、って？」

「乃愛も自分勝手の『も』だよ。何、『も』って？誰もなの？」

「え？……さ、さあ。」

「女？もしかして今日女の人と喋ったの？お兄ちゃん？」

別の人と話してるんじゃないかと錯覚してしまう程冷静な態度。二重人格としか言い様がない話し方、声、表情。

経験上、『お兄ちゃん』なんてノーマルな呼び方をするのはものすごく怒ってる時だ。

京平は肩を震わせ、背中からどつと汗が吹き出す。その汗までもが冷たく氷のようで、恐怖心はどんどん膨んでいった。

「ど、どーだったかなあ。」

「何回喋ったかわからないくらいよく話すの?」

「違う違う! 今日初めて話ただけで…っ」

そう口を滑らせてからハツとする。

「む…やっぱり話したんだ。どんな人? 名前は? 可愛い? どうゆう雰囲気? 身長は? 年齢は? 学校の人?」

かわいいなんて言ったら間違いなく殺される…!!

「変な人。冬なんとかって名前で。ど、どぶす。身長は3mくらいある巨人。優しい雰囲気で…じゃなかった。冷たい人。年は60すぎだな、うん。それから通りすがりの人だった。」

「嘘だッ!」

「え、な、なんでレナ…!」

「なんでそんな巨人がお兄ちゃんに話しかけるのよ?」

「え…た、確かに。」

「だいたい何話したワケ?」

あんたがあたしの夫に相応しいかどうか…見定めてあげる。

「大した事は何も話してないでう。あ、噛んだ。」

まさかプロポーズされた、だなんて死んでも言えない。
むしろ言えば死ぬ事になりかねない。

話ただけでこんな尋問まがいの行動に出るのだ。

少しでもラブコメ的要素の含む内容は命に関わる大問題。

「本当にかわいくない人なんでしょうねッ！？スタイルとかはッ！
！??？」

「あ、ああ。不憫な程不細工な女だ。そして海外のテレビ番組で紹介される過食症の人並みの太り具合。」

「ごめんなさい夏姫様！と心の中で土下座やら土下寝やらする。

取り敢えず妹から隠す為に彼女の逆を言ってみたが、少しリアリ
ティーに欠いているかもしれない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7998k/>

彼女と別れる上手な方法。

2010年10月10日18時58分発行